

フィールドワークという出会い

佐野文哉

「フィールドワークをする」とはいったいどのような経験なのだろうか。

大学院に入学して初めて本格的にフィールド調査に取り組んだ私にとって、「フィールドワーク」は未知であった。てっきり大学院の授業で教えてくれるのかと思いきや、少なくとも私が入学した当時は、誰も「フィールドワークの方法」は教えてくれなかった。同じ院生の先輩たちに聞いても「とりあえず行ってみな」とか「見たことを全部書けばいいよ」と言われるばかり。『なんの回答にもなっていないじゃないか!』と内心毒づきながらも、仕方がないのでとにかくフィールドワークに出てみた。そして今の私は、フィールドワークで出会った人びとの関わりや、その出会いの経験を通して、そんな先輩たちの一見投げやりに思えるアドバイスがじつは大事なことを言っていたのだということに少しずつ気がつきはじめている。今回はそんな私の「手探りのフィールドワーク体験」について話してみたい。

手話・ろう者という研究対象

私の研究テーマは手話、そしてそれを用いるろう者である（ここではとりあえず、「手話を用いる聴覚障害者」という意味でろう者ということばを用いる）。修士課程では日本の手話サークルでフィールドワークを行ない、博士課程に進学した現在は、フィジーで同じくろう者・手話について調査をしている。

「フィジーの（あるいは日本の）ろう者・手話について研究をしています」というと、「手話は世界共通ではないのか」とよく聞かれる。答えは否である。手話は音声言語と同じように地域によって異なり、現在、世界には 120 種類近い手話が存在するといわれている。また手話の分布は音声言語の分布と重なるとは限らない。たとえばアメリカ手話とイギリス手話では構造が大きく異なっているが、それは手話が音声言語とは異なる歴史的系譜をもっているからである。そのため同一地域の音声言語と手話が同じ語彙・文法構造をもっているとも限らず、たとえば日本語と日本手話では語彙や文法が異なる。

ただし手話が同じ地域の音声言語の影響を受けていないというわけではない。たとえば日本では、独自の語彙・文法体系をもつ日本手話のほかに、日本語の語彙や文法に強く影響を受けた「日本語対応手話」と呼ばれる形態の手話も用いられている。この二つは明確に区分されるとは限らず、その中間のような形態の手話を用いる人びともいる。また手話は音声言語とは異なり、多くの地域の聾学校で使用が禁じられてきたうえに、書記方法が確立していないため、いわゆる共通語が成立する機会がなく、少なくとも語彙のレベルでは地域や個人によりさまざまなバリエーションがあることが知られている。

私が 2 年前まで参与観察を行っていた日本のとある手話サークルもそうした日本の手話を

めぐる複雑な状況を反映した場であった。その手話サークルには、健聴者とろう者が一緒に参加していたが、そこではろう者、健聴者を問わず、多くの人のあいだで繰り返し語られる、ある「決まり文句」があった。それは「手話はいろいろある」、そして「ろう者はいろいろいる」というものである。実際にそれはその通りであった。その手話サークルに通う人びとは、ろう者、健聴者ともにさまざまな背景をもっており、出身地、学校経験、職業、手話学習歴などは多種多様であった。そんな彼らが用いる「手話」も語彙・文法ともにじつに多彩であった。

今思えばじつに興味深い状況である。しかしそうした現実直面した当時の私は、「修論でいったいなにを書けばいいのだろうか」と途方に暮れた。『手話がいろいろある、ろう者がいろいろいるのはわかった。でもだからなんなんだ』と。このときの私は、彼らの言う「いろいろある（いる）」という発言のほんとうの意義がわかっていなかった。

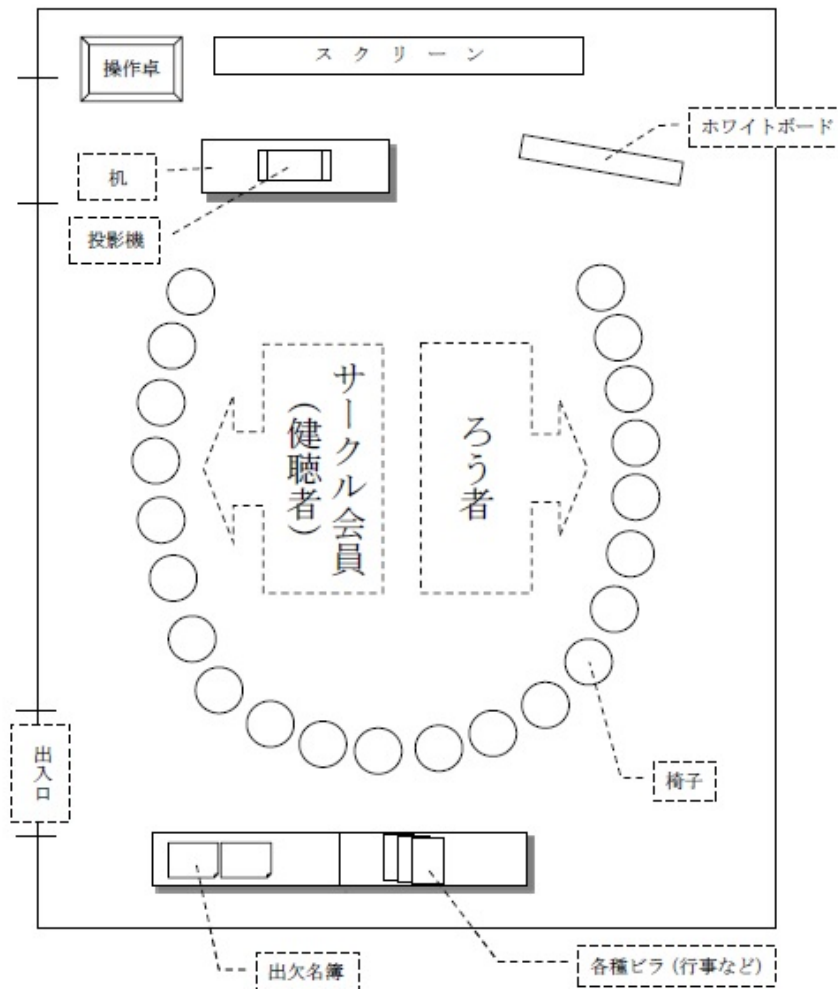


写真1 手話サークルの会場図。ホワイトボード、スクリーン、U字型になった座席など、コミュニケーションを成立させるためのさまざまな工夫が見られる。

出会いと関わりから学んだ「身構え」

それでも彼らとの関わりを続けているうちに、いろいろなことがわかってきた。たとえば「ろう者であること」が語られる状況を詳しくみても、「ろう者」であることの意味が、文脈や状況に応じてさまざまに変化していることに気がついた。それは「流ちょうな手話話者」であることもあれば、「聾学校出身者」であったり、「耳の聞こえない者」であったりした。こうした事実とともに私は、ふと、それまでの自分が「ろう者であるための絶対的な基準」のようなものを探していたのだということに気がついた。実際には、すべての「ろう者」に当てはまる基準があるわけではなかった。「ろう者」であるとは、なにかしらの基準で定まる属性のようなものではなく、自らをこの世界のなかに他者とともに位置づける方法であり、その人の生き様なのだ。

そんな彼らと関わっているうちに、自分が「赤の他人」ではいられなくなっていた。ある日、数人のろう者と遊びに出かけたときのこと。夜に飲み会をするから電話でお店に予約してくれと頼まれた。ろう者女性 Yk さんがケータイでお店を探し、そこに私が電話をかけた。休日ということもあり、なかなか空いているお店が見つからず、4 軒目でやっと予約ができそうなお店を見つけた。電話口には若い女性。私はろう者の代理で電話をしていることを伝えて、Yk さんと手話でやりとりをしながら、Yk さんの名前でお店の予約を取った。電話口の女性に電話番号を教えてくれと言われたので、再度ろう者の代理で電話していることを伝え、電話はできないのだがどうすればいいのかと確認した。すると「そういうときはお兄さんの電話番号で」と不機嫌そうに言われた。なにをいちいち聞いているんだと言わんばかりの口調に、私は憤りを感じた。音声言語を中心とした社会のなかで不利益を被り、つらい思いをしている人間がいるという事実を目を向けようとしなないかのような態度が許せなかった。メールなどでの対応も無理だと言われ、仕方がないので私の電話番号を伝えた。電話を切った後、Yk さんに手話でつぎのように報告した。〈予約した。電話番号が必要だと言われたので、俺の番号を教えた〉。それに対して Yk さんは笑いながら〈わかった。ありがとう〉と言ってくれた。私は〈ありがとう〉と言われたことがなんだかとてもいたたまれなくて、『もう少しうまい対応の仕方があったのではないか』と反省した。

「憤りを感じ」、「いたたまれなく」なった感情とともにこうした出来事を想起するとき、私は、その場の状況や関係にどうしようもなく「参与」している自分を発見する。

その一方で、私と彼らとの隔たりを痛感させられたことや、私が彼らを傷つけ怒らせてしまったこともあった。私は大学院に入学し、日本のろう者・手話に関する調査に着手しはじめてから日本手話を学びはじめた。そのため、とくに調査の最初のほうでは、手話で話されている内容がわからずに疎外感を感じるが多かった。ある日、私はそうした「手話がわからないゆえの疎外感」についてサークル参加者の前で語ったことがあった。その場には健聴者だけでなくろう者もおり、私は彼らにむかって手話でつぎのように語りかけた。〈ろう者のみなさんもわかると思う。相手の言語がわからないというのはすごく苦しい体験ですね。〉音声言語中心の社会のなかで「相手のことばがわからない」状況に直面することの多いろう者は、私の

感じた「手話がわからないつらさ」も共感してくれるだろうと考えていた。我ながら、なんともナイーブな想像力だったと思う。私の発言に対して、後日、ろう者男性のMoさんがつぎのように応えた。彼は日本手話初心者の私に合わせて、声をつけながら手話をしてくれた。〈こういう場でみんなの話している手話がわからないというのは苦しいかもしれない。けど、だから『ろう者と健聴者は同じ』というのは違うと思う。あんたは家に帰れば、大学に行けば仲間と話しができる。アルバイトに行けば友達と話しができる。でも僕たちは違う。仕事に行っても（手話ができない）周りの人の会話がわからないからストレスがたまっていく。だからこういう場で、そのたまった思いを全部吐きだすようにしゃべるんだ。〉キツイ言い方にならないようにという配慮だろう、Moさんは和やかに笑いながらこれを語ってくれた。しかし彼が冗談や笑い話でこれを言っているのではないことは明らかだった。彼らの語りと、その背景にあるものの重さを自分がしっかりと理解していなかったのだと思い知らされた。このときに言われたことばは、今でも私の心に重く残りつづけている。

こうしたさまざまな出会いや経験を繰り返しているうちに、手話サークルでさんざん聞いて（見て）いた「手話はいろいろある」「ろう者はいろいろいる」ということばのとらえ方が自分のなかで変化していることに気がついた。それは、ただ単に現実を語っていたのではなく、「目の前にいるその人を見る」ことの大切さを語っていたのだ。安易に自分と重ねあわせたり、なにかの型に当てはめてしまったりせずに、きわめて多様な背景や価値観をもち、多彩な現れ方をする具体的な「誰々さん」に向き合うための「身構え」だったのだ。

フィールドワークをするうえでもっとも大事な姿勢を、私は、フィールドワークで出会った人びととの関わりから教えてもらった。

日本からフィジーへ

そうしたフィールドワークを通した学びは、現在でも終わることなく続いている。

博士課程への進学を機にフィールドをフィジーに変更し、現地のろう者・手話について調査をはじめた。一昨年はさまざまな障害をもつ子どもが通う障害児学校で参与観察を行ない、昨年はオーストラリア、ニュージーランドを除く太平洋諸国で唯一とされる聾学校を訪れて参与観察を行なった。慣れ親しんだ日本とは異なる気候、生活様式、人間関係のなかでの調査はストレスフルなものだった。海外で長期調査をしている同僚たちのすごさ（の一端）が身にしみてわかった。

日本手話とフィジー手話では語彙や文法が大きく異なる。そのため、新たに一から手話を学ばなければならなかった。しかし日本でのフィールドワークを通して視覚言語の形式に多少なりとも慣れていたのである、初めて日本手話に触れたときよりはスムーズにフィジー手話の習得に励むことができた。だんだんとフィジー手話を覚えてきて、現地のろう者が話していることもわかるようになってきた。フィジー手話も日本手話に負けず劣らずとても魅力的だ。また調査を進めているうちにフィジーのろう者や手話を取りまく状況が非常にユニークであるこ

ともわかってきた。

しかしここではフィジーのろう者や手話に関する話ではなくて、フィジーの聾学校で出会った耳の聞こえる少女の話をしたい。それはその少女との出会いが、私に、コミュニケーションとはなにかを考えるきっかけを与えてくれたからだ。



写真2 学校の校庭から。

フィジーの聾学校にはフィジーの各地から聴覚障害をもつ子どもが集まってきていた。またそれだけでなく、フィジー国外のオセアニアのさまざまな地域からも聴覚障害をもつ子どもが集まってきており、私が訪問した昨年には、40 人強の生徒がいた。スタッフは健聴者とうろう者が半々くらい。1999 年の設立当時から手話教育が採用されてきたらしく、スタッフもそのほとんどが流ちょうな手話話者である。クラスは pre school クラス（幼稚部のようなもの）を含めて全部で七つ。私は一日ごとに異なるクラスを訪問して参与観察をさせてもらった。

フィジー手話を用いて生徒やスタッフとある程度の会話が交わせるようになったある日のこと。私はそれまで一度も行っていなかった pre school クラスへと足を運んだ。そのクラスには 5 歳から 7 歳までの子どもが 7 人在籍していたが、私が訪問したときには、そのうちの 6 人の子どもが教室の壁に貼られた掲示物の前に座って、教員助手と一緒に曜日について学習をしているところだった。私は生徒たちの後ろにあった椅子に座ってその様子を眺めはじめた。す

ると少しして、後ろのほうに座っていた一人の少女が立ち上がり、私のもとへと歩いてきた。私が書いていたメモをニコニコしながらじっと覗き込んでくる。授業をしていた教員助手が「Kn！ここに座りなさい！」と音声フィジー語で叫びかけた。Kn と呼ばれた少女は一瞬反応したように見えたが、元の場所には戻らず、私の顔をニコニコしながら覗き込んできた。教員助手は Kn の手を引いて、元の場所に座らせた。このとき教員助手は、私に向かって、「Kn は健聴者なの」と英語で教えてくれた。

その後、担任の先生がしてくれた説明によると、このとき Kn は聾学校に来てまだ 3 週間で、手話はまったくできないらしかった。教えようと試みたが覚える気配がないのと言っていた。そしてどうやら音声言語もできないようだった。まったく口を利かない彼女のことを「ろう」だと思った家族が、Kn をこの学校に送り出したのだと、後日、担任の先生が教えてくれた。ほかの生徒が椅子に座って授業を受けているなか、Kn は一人立ちあがっては教室内をうろうろし、そのたびに先生に元の場所まで連れ戻されていた。



写真 3 教室の壁に貼られた掲示物。



写真4 授業の風景。

それから数時間後のこと。それまで教室内をうろうろしていた Kn が、窓の外を眺めて佇んでいるのを見かけた。少しして Kn がこちらを振り向くと、なんと彼女は涙を流していた。しかし表情は先ほどと変わらずニコニコしている。嗚咽をあげるでもなく、表情を崩すこともなく、ただ静かに涙を流していた。私とその不思議な光景に呆然していると、担任の先生が Kn に声でなにかを話しかけた。そして私にむかって「Kn はおもらしをするとこうやって涙を流すの」と教えてくれた。教員助手が教室においてあったオムツを手にとり、Kn の手を引いてトイレへと向かっていった。

私は、この光景を見たとき、胸を打たれるような思いがした。それは決して、Kn が「可哀そう」だと思ったからではない。そうではなくこの場に生きる彼女のふるまいの豊かさと、それが誘発した出来事に感動し、また共感したのだ。Kn がニコニコと笑いながら流した涙は、Kn がこの世界のなかで他者とともに生きていく方法であると同時に、その証しであるように私には思えた。Kn はたしかに音声言語も手話もできない。自らの意思を明示的に表現するのは得意でないといえる。しかし、おもらしに濡れる服があり、ニコニコと涙を流す Kn がおり、その場に立ち会う他者がいる世界で、Kn のふるまいは「意味」を帯びたものとなり、それを見つめる私たちに対して多くのことを「語り」かけてくる。

こうした出来事を目の当たりにしたときに、果たして「Kn はコミュニケーションができな

い」といえるのだろうかと考えた。「明示的な 1 対 1 の言語伝達」という観点からは外れてしまうかもしれないが、モノがあり他者がいる環境のなかで、Kn はたしかに関係を構築しやりとりを交わしていたではないか。重要なのは既存の「言語」という型に当てはめて Kn のコミュニケーション能力を判断することではなく、Kn がこの世界で他者と関係を構築する方法とその過程をつぶさに観察することではないか。Kn との出会いは、私に、音声言語と手話を貫く人間のコミュニケーションの奥深さを教えてくれた。

昨年の 12 月、聾学校の 3 学期が終わるころのこと。pre school の担任の先生から、Kn は来年には別の学校に転校するのだと聞かされた。「Kn はろう者ではないから。Kn にふさわしい教育が受けられるところに転校させる」とのことだった。今年の 2 月に日本に帰国してきた私は、その後 Kn がどうなったのかまだ知らない。

人や出来事との「出会い方」

ここまで私のフィールドワーク体験について話をしてきた。

「フィールドワークの方法」を教えてもらえなかった私は、フィールドワークを通して、フィールドワークについて学んできた。フィールドワークに出るたびに新たな人や出来事と出会った。またフィールドから戻り、それを振り返りまとめる作業のなかで、それまで気がつかなかった自分の姿や新たな事実を発見した。そしてそうした新たな出会いや発見を通して、それまで出会ってきた人や出来事に対する見方や、それからの出会い方それ自体が変わっていった。そうした終わりのない往復運動のなかに私のフィールドワーク体験はあった／ある。問われていたのは、「データの取り方」やその技法ではなく、人や出来事との「出会い方」それ自体だったのだ。冒頭にあげた先輩たちのアドバイスは、決して投げやりだったのではなく、「とりあえず行って」「見たことを全部書く過程のなかで、フィールドワークとは何であるかを自ら学びとれ、と言っていたのだろう。

フィジーでのフィールドワークはまだ予定の半分も終わっていない。これからどのような「出会い」があるのだろうか。私のフィールドワークはまだまだ終わりそうにない。